

Y3-12

東日本大震災の発災当日に日赤救護班として石巻に出動した経験

長岡赤十字病院 救命救急センター
こばやし かずき
 小林 和紀、内藤万砂文、江部 克也、
 江部 佑輔

【活動経過】発災当日3月11日に、DMATとして出動した救護班第1班に続き、午後5時30分に救護班第2班として宮城県支部を目指して病院を出発した。途中で石巻赤十字病院に行き先変更の連絡が入り、磐越自動車道、国道4号線を通して宮城に入った。海岸沿いの道が通行不能であったため、内陸側に道路を変更しつつ進み、12日の午前3時に到着した。12日の午前中は被害状況と医療ニーズを調べるために市内の巡回を行った。建物の倒壊はほとんど見られず、街の主要部は水没して陸路で行ける範囲は限られていたが、学校や会社に人が集まっていた。12日の午後は病院で黄色エリアの診療を行った。外傷患者はほとんど見られず、運ばれて来る患者の多くは軽度の低体温症で、着替えて毛布で休むだけで軽快するものの、帰る場所も手段も無いため院内で夜を明かす状況であった。13日の午前中は病院玄関でトリアージを行った。中には発災から何も口にできず昏睡状態の乳児もいたが、慢性薬の処方をもたらした人、透析や在宅酸素の継続を必要とする人、トイレや水道を借りて来た人、安否情報を求めて来た人、出産の相談を希望する人など、病院に来る目的は診察希望の他にも様々であった。この頃には他県の救護班も集まってきており、正午過ぎに帰路についた。

【考察】石巻到着時には伝聞を除けばテレビとラジオ以外に情報源は無く、使用可能な連絡手段は日赤無線と衛星電話のみであった。このような状況では自分たちの足で情報を集め、全員で頻回のミーティングを行って情報共有の方が効率的である。また、今回のような広域災害では多くの医療機関が一時的に機能を失うため、始めから慢性期の問題が出現する。災害拠点病院の高次救急機能を守るためにも、資器材と継続性に優れた日赤救護班が初動から出る必要がある。

Y3-13

DMATと赤十字救護班の架け橋として避難所において救護所立ち上げを行った経験

さいたま赤十字病院 救命救急センター 救急医学科
たくち しげまさ
 田口 茂正、清水 敬樹、早川 桂、
 石井 義剛、関 藍、矢野 博子、
 熊谷純一郎、五木田昌士、勅使河原勝伸、
 横手 龍、清田 和也

【背景】津波災害が中心であった東日本大震災では、DMATが想定していた重症患者に対する救命医療のニーズは多くなかった。その中で当隊はDMATとして超急性期の避難所生活者への医療を行う機会を得たので報告する。

【活動内容】平成23年3月11日16時に当院DMATが出発。東北自動車道を北上し23時30分に仙台入りし、DMAT参集拠点である国立病院機構仙台医療センターへ到着した。夜間は新規発生傷病者が少なく院内で待機した後、陸上自衛隊仙台駐屯地において、トリアージポストと応急救護所を展開し、ヘリによる救助者に対しトリアージを行った。トリアージは全員緑であり、同基地への搬送が中止となったため、医療センターへ戻った。同センターではシフト制で病院支援が行われた。統括DMATの指示により、赤十字病院からのDMATのうち、救急車と十分な資器材を有する5隊が前線の避難所で救護所立ち上げ業務を行うこととなった。当隊は仙台市若林区の津波到達地から500m程内陸にある七郷小学校へ派遣された。避難者は約2000名であり、種々の症状を訴える傷病者の診療、医療機関への搬送、衛生面の助言、伝染性疾患が疑われる避難者の隔離方策、近隣の避難所への往診業務などを行った。後続の赤十字救護班に引き継ぎし、3月14日当隊は撤収した。

【考察】発災24時間以内の救護所立ち上げは、情報・物資不足やライフライン・交通網破綻の影響で従来の赤十字救護班業務にはない困難が多かった。統括DMATからは「DMATと赤十字救護班の架け橋になって欲しい」と依頼された。DMATの本来の目的からは外れたが、医療資源と医療ニーズのバランスを統括DMATが的確に判断したことで成立した活動であった。